日常　もしくは　もう一つの旅立ち

沢木　進

ラジオの音　ラジオからの音色
たつまきのおと
低く
パトカーが一台公園のそばに止った
おまわりが四、五人飛び降りて走った
オレの横を
オレも走った
斜めに交差してそれぞれの路地に消えた
あとは夜の霧だ　いやこがらしだ
あの夜のように
あの日の歩行者天国のように
輻湊していくオレの過去へと
最もなにごともおこらなかった過去だけが
はめ絵のように繋がっていく
オレの横で妻が驚いたように急須をたおした

今夜も
しのび泣くように地鳴りがしている
隣の部屋からは
ラブミーテンダー　あるいはビートルズのイエスタディがカラカラ音をたてて回るプレーヤーから聞こえてくる
彼、もしくは彼女が何を食って生きているのかいつも気になる

☆　☆

旅　に出たいといつも思った
夜の闇に砂塵が舞って
リゲルが、ヴェガが親しげにゆれると夏
夏には置き忘れてきた幾組かの剣とナイフと
死ぬはずだった無数のオレのしゃれこうべを集めるために
夏の砂丘

☆　☆

オレがあまりにオレに関りすぎている間に、季節は変わりすぎてしまっていた
三条河原で川面をながめていた時、というのはウソだ
金色の光る表象が現れ出、オレは光の反射だと思っていたが

オレはその時
オレの横にいた女性の目で、その日の記憶をながめていた
かわりにオレは
かわいたソネットを口ずさみ、オレの即興の節まわしが、意外に朗々とあたりの空気をふ
るわせていった
夏の日であった　しかし暑くはなかった
風景がスローモーションでゆがんでいった
明るい驟雨の後のささやかな犯罪のように
しかしそれはウソなのだ

☆　☆

昔、小学校の先生が世界とは大きな無脊椎動物なのだと教えてくれた
世界はオレにざっくりと傷口を見せることはしなかった
ただ世界がオレにたよりなげな姿を見せる時　オレは走った
オレは走った

☆　☆

地鳴りは今日も続いていた
ひとつの世界の夜の闇が破られるともうひとつの夜が現われる
闇はどこまでも深まり続ける

幻を視るひと
巨大な廃屋　巨大な難破船、今なお舳先を高く天空へとかかげて
見なれない異星の風土
ゆがんでいく日々、ゆがんでいくオレの文字　旅立ち
オレは寒さにふるえながら、新しい石鹸を箱から出し、包み紙を無器用に破り裂いた
今は夏？
ひとつの旅立ちからもうひとつの旅立ちへと
もうひとつのオレ達の日々へと
オレのコニャック　オレのあめ色の灰皿　オレの汗ばんだシーツが
思い思いの方向に
叫び声を放っている